

【小松左京氏追悼エッセイ】「小松さんの思い出」（抄）

横田順彌

初めて、小松さんに声をかけていただいたのは、どこかのお寺で開かれたSFコンベンションの休憩時間。ぼくが賽銭箱の脇に座っていると、うしろから誰かが肩を叩いた。

「おい、横ちゃん」

「えっ、あつ、小松さん！」

「知ってたか」

「知ってますよ。小松さんといったら……」「そんなことは、ともかくだ。横ちゃん、きみの『日本SFこてん古典』は、おもしろいぞ」

こんなファーストコンタクトは、生まれてはじめてだった。「おい、横ちゃん」だもんね。

小松さんは上京すると、SF作家の卵たちを、ホテルニューオータニに呼び寄せることが、しばしばだった。電話が鳴る。

「おい。みんなに連絡して連れてこい」

「なんの用事ですか？」

「用事なんか無い。飯と一緒に食うんだ。必ずくるんだぞ」
某氏いわく。

「小松さんは、いい人なんだけど、東京にくると飯を食わせてくれるのが問題だな」
ちなみに、某氏はぼくではない。

ぼくが結婚する直前。挨拶に行くと、小松さんがいった。

「横ちゃん、おれに初夜権を渡せ」

渡せば、よかった。初夜権だけじゃなく全部。結局、離婚しちゃったんだから。

小松さんの一日秘書を勤めたことがある。「なにをすれば、いいんですか？」

「ただ、ついてくればいい」

そしてハイヤーであちらこちら、大きな会社に連れて行かれた。東宝映画に行ったら、田中友幸さんが現れた。小松作品の映画化の話をしている。小松さんがトイレに立ったら、田中さんが、ぼくに頭をペコペコと下げていった。

「横田さんからも、ぜひ口添えをしてください」

ぼくは、どうしていいかわからない。

「は、はあ」

帰り道、小松さんがいった。

「田中さんは、なにかいったか？」

「口添えをしてくれと」

「うんといえばよかったんだ。ただし、金はたくさん出せとだぞ」

『さよならジュピター』の原案を練る会に、呼ばれた。

「横ちゃん、なにか、いいアイデアはないか？」

「木星の大赤班を、大赤飯に変えるというのはどうでしょう」

「もう、次からこなくていいっ」

それ以降、会には呼ばれなくなつた。

「小松さん、ぼくを公認の弟子にしてください」

食事中、どさくさまぎれに、お願いした。「うん。いい。どうでも。このギョウザはうまいぞ」

とにかく、ぼくは小松左京公認のただひとりの弟子になった。

ぼくが鬱病になった。

「小松さん、ウツになっちゃいました」

「そうか。横ちゃんも男になってきたな」

「はあ？」

「飲む、鬱、買うというだろう」

「横ちゃん、おれも鬱病になった」

「唯一、ぼくの勝ちですね」

「よし。もっと酷いウツになってやろう」

「仕事でハンググライダーに乗ったことがある。」

「大分県に行ってハンググライダーで、空を飛びました」

「ほう。そいつはすごい。東京から飛んで行ったのか？」

「いいえ。向こうで十分間飛んだんです」

「なーんだ。つまらんなあ」

SF大会の時。

「横ちゃん。おもしろいものを見に行こう」「どこに行くんですか？」

「風呂だ」

風呂場に行くと、ベレー帽なしの手塚治虫さんが、先に入っていた。

「な、おもしろいだろ？」

「は、はい」

「おい。マージャンをやろう」

「三人しかいませんが」

「いいよ。三人マージャンで。ルールは二ヌケだぞ」

(終り)